
想いはあの場所で

蒼井 雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想いはあの場所で

【Nコード】

N5383H

【作者名】

蒼井 雪

【あらすじ】

大口の契約が取れて浮かれ気分の、俺。幸せ気分で翌日から3連休に思いを馳せてた帰宅時ラッシュ。久しぶりに会ったのは、高校時代の委員長だった。……「日常の狭間で」と、登場人物や話がリンクする部分がありますが、こちらのみでもお読みいただけます。

第1話 俺にとって その日(前書き)

「日常の狭間で」と、登場人物や話がリンクする部分がありますが、
こちらのみでもお読みいただけます。

第1話 俺にとって その日

俺の今日は、少しおかしかったのかもしれない。

いつもなら門前払いの飛び込み営業が、なぜかうまくいった。
うちみたいな中堅会社にとっては、垂涎の的。
大企業の総務部長に、気に入られて。

部長も課長も踊りださんばかりに、俺を褒めたたえる。
苦しい経営状況の中、一筋の光明とまで言われた。

浮かれ気分だったのは、否めない。

会社を出る時に降り出した雨を、いつもならついてないと思うのに、
今日に限っては嬉し涙と決め付ける。

7月だというのに、梅雨明けしないムシムシした天気も、今の俺に
とっちゃ何でもねえ。

幸せ絶頂、山の上。

これで彼女がいれば、最高だ。

「.....」

一瞬気分が落ち込むも、ジェットコースター並に立ち直る。

お手軽だぜ、俺。

雨の中、電車に乗り込み家路を急ぐ。

ラッシュだけど、全然オツケー。

明日は土曜日、ハッピーマンデーで3連休。
陳腐な名前でも、連休が増えるのは嬉しいさ。
酒飲んでうまいもん食って、寝ちまおう。

最高な一日だ〜
最高に贅沢だ〜

「ぐえっ……。」
幸せな妄想中の俺。突然腹に加わった圧力に、つい声が出る。
下を見ると、目の前に立つ女が申し訳なさそうに俺を見上げた。

「すみません……。」
咳くような、小声の言葉。

ま、確かにこんなラッシュ状態。
おされりやあ、耐えらんないよね。
ごめん、俺、幸せ妄想発動中でぜんぜん気にしてなかったよ。

「大丈夫ですよ。」
同じように、彼女だけに聞えるように伝える。

ホツとしたように俺を見上げるその表情が、可愛らしい。
何歳くらいだろ。
スーツ着てるから、社会人なんだろうけれど。
なんか、化粧薄いな。
俺の周りにいる同僚の女って、化粧濃いからなんか新鮮。

それ以上に懸命に俺から離れようと努力している姿が、なんだか微

笑ましい。

「あの、寄りかかって大丈夫ですよ。」
可愛そうなのもあるけれど。

今日の俺は、ご満悦な気分なのさ。

彼女の重みくらい、なんてことはないさ。

「え……、それは申し訳ないですし……。」

困惑したような表情をこちらに向けたその瞬間、カーブに差し掛かったのか車両が揺れる。

「あつ……。」

彼女は後ろから押されて、そのまま俺の胸にしがみついた。

ま、ドキンツ……となったのは内緒にしておこう。

「……すみません……。」

断ろうとしていたものの状況がそうなってしまって、申し訳なさそうに俺を見上げた。

「いいえ。」

にこっ……と、笑いながら彼女を見る。

いや、下心なんて。そんな。

ただの親切心だから。

自分に言い訳しながら、苦しそうに、それでも少し微笑んでくれた彼女を見下ろして、なんとなく違和感を感じる。

違和感？いや、そうじゃなくて……

ほら、あれだよあれ。

ここ来たことあるなーみたいなの。初めての場所なのに。

そう、既視感！英語で言うならデジャヴ？そこいらないか（笑

そんなのを、感じる。

ほら？

この見下ろす感じ。

彼女の、匂い。

頭の奥で、ピンときた。

もしかして。

「委員長？」

思わず大きな声で呼びかける。

周りが何事かと俺を見るのに気がついて、一瞬しまった・・・と思
いながら彼女を見下ろす。

彼女は、怪訝そうな表情で俺を見上げると、眉を少し上げた。

「もしかして、津田君？」

周りを気にしながら頷くと、一瞬複雑な視線を俺に向けて微かに笑
う。

外を見ると、折りよく俺の降りる駅に電車が滑り込んでいく。

彼女を見てにやっと笑うと、電車のドアが開くと同時に手を掴んで
外に出た。

同じ駅で降りる人達に流されながら、改札口へ向う。

「ちよつと、津田君？何？」

彼女は俺に合わせるように、小走りに引っ張られていく。

俺としては、鼻歌でも歌いたいたいところ。

人波を抜けて改札をでる。

そこでやっと彼女の方を振り向く。

「久しぶりじゃん、委員長。せっかくだから飲みにいこ。」
「えっ……？」

いきなりの誘いに驚く彼女に、拒否させない威圧の微笑みオーラ。
今日の俺は、最強なんだ。

彼女は困ったように笑うと、ゆっくりと頷いた。

第2話 2人の現在

「おっ、空いてる。らっきー。」

近所の居酒屋の引き戸を開けて機嫌よくそう呟くと、カウンターの中からおっちゃんが突っ込みを入れる。

「入って早々、そりやねえよ。和樹。」

「わりーわりー。奥、空いてる？」

霧雨に濡れたスーツの肩を、ぱつ・・と掃つと後ろから声があがる。

「冷たつ。」

その声に振り返る。

委員長が驚いたように、頬を拭いていた。

「あ、ごめん委員長。」

ハンカチを出す彼女に謝ると、なぜかおっちゃんの声が飛んできた。

「お前、女連れかよ！生意気な！」

カウンターから身を乗り出して、彼女を見るおっちゃん。

委員長は面食らいながらも、軽くお辞儀をする。

「彼女は委員長の・・。」

「どれだけ前の話よ。高校の同級生で、椎名と申します。」

綺麗な自己紹介に、綺麗なお辞儀。

おっちゃんはぼかんと口をあけていたけれど、すぐに正気を取り戻す。

「おかしい、おかしいって！和樹にこんな礼儀正しい女性が・・。」

「いやだから、同級生だって。なんたって、最強委員長だったからね。あ、奥いくよー。」

委員長の肩を軽く押しながら、広くもない居酒屋の一番奥、唯一の個室に上がりこむ。

掘りごたつになっていて、座敷より楽だしカウンターやテーブル席より、周りを気にしなくていいこの場所は俺のお気に入り。

勢いに押されて座敷に座る彼女は、展開についていくのがやっとだった様にゆっくりと息を吐き出した。

おっちゃんが持ってきたお絞りで手を拭きながら、適当にアルコールと食事を頼む。

2人だけの空間になってから、片手を上げて軽く謝る。

「悪いな、ちよつと強引過ぎた？」

いきなり謝る俺に、一瞬目を見開きながらも微笑む。

「強引なのは昔からじゃない。まあ、謝るだけ大人になった？」

面白そうに口元を緩めると、右手で頬杖をつく。

「ひでえな、委員長。俺、そんなに強引？」

「違うといえるのかしら？」

そう言いながら俺に視線を走らせる彼女に、大人の艶を感じて一瞬黙る。

彼女は黙った俺を、違う理由でそうなったと勘違いしたようで口端を綻ばせた。

くすりと笑う彼女は、大人の女性に変わってる。

高校生の頃には感じなかったモノに、なぜか鼓動が早くなる。

それに比べて、俺はあの頃とちつとも変わってない気がする。

なんだかちよつと、劣等感。

・・・置いていかれた感じ・・・？

「お待ちどうぞ！」

スパーツと障子が開かれて、おっちゃん顔を出した。びっくりして2人で見つめると、つまんなそうに舌打ちする。

「なんだ、いちやこいてると思ったのに。つまんねえな。」

「何を期待してるんだ、まったく。」

おっちゃんから料理やアルコールを受け取りながら、さっさと障子を閉める。

とりあえずグラスを合わせ、懐かしさを確かめる。

「委員長、今何やってるの？OLさんなのは見て分かるけど。」

彼女は梅酒のソーダ割りを口に含みながら、軽く頷く。

「衣料品会社の、経理担当。現代文が苦手な私でも、楽しくやっていけるわ。」

「そういえば苦手だったよねえ、委員長。いつも長文読解に難儀してたっけ。」

うるさいわねと、少し頬を膨らませる彼女はグラスを持ち上げて一口飲むと俺を見る。

「そういうあなたは何をしてるのよ。理数系、からきしだったじゃない。」

「・・・営業。」

ぷっ・・・と噴出す、彼女の声。

「話し上手のあなたには、うってつけね。ま、数学は厳しそうですけどっ。」

ここぞとばかりに、やり返す。

5年ぶりにあっただのに、頭は高校に戻ったみたい。

自己紹介してるところが、なんか合コンみたいだけど。

「でも、今日の俺は凄いでしょ？すげえ大口の取引を成功させてさ。会社で褒められたよ。」

・・・と。

言うてから、ちょっと後悔。

大人なのに、何、自慢してるんだろ。恥ずかしい奴。

はは・・・と笑いながら俯くと、頭のてっぺんに優しい手のひらの重み加わる。

「凄いじゃない、頑張ったのね。」

そう、彼女が笑うから。

俺も、気を取り直して思いっきりにこやかに笑い返す。

「彼女は？津田君なら、引く手あまたでしょう？」

ちっ、さっき自分で考えて落ち込んだ話題を。

「いないよ。委員長は？」

ちよつと不貞腐れながらビールを口にすると、彼女は横に首を振った。

「私もよ、いるように見えないでしょ？」

少し首を傾げて、横に振る。

「えー、なんか綺麗になったし。いる気がするけどなあ。」

俺の言葉に、苦笑い。

「津田君は、口がうまいんだから。あ、そうそう。同じクラスの綾瀬さん覚えてる？」

話を流された気分だったけど、懐かしい名前にふと止まる。

脳裏を、小柄な女性がよぎる。

「桜ちゃん？」

彼女は、そうその綾瀬桜さん、と小さく頷く。

「彼女、大学生と付き合い始めたそうよ。実は先週会ったの。」

「え！きみっちゃんは？」

驚いて、つい声を抑えるのを忘れる。

委員長は、少し眉間に皺を寄せて小声で呟いた。

「早坂君、なんだか他に好きな子ができたらしくて、綾瀬さんと別れたみたい。」

きみっちゃん・・・早坂 公義と綾瀬 桜は高校の時の同級生。

3年の春頃から付き合い合っていて、学校ではある意味有名な恋人同士だった。

べたべた甘いカップルじゃなくて、陸上をやっていたきみっちゃん
と寄り添うようにいた桜ちゃん。

その雰囲気は、皆の憧れの的だった。

大学いってもずっと続いていて、一番に結婚すると思ってた。

「そ・・・うなんだ・・・。うわ、びっくり。それできみっちゃんは、

他の子と付き合い合ってるの？」

「いいえ、付き合い合ったけどすぐに別れたみたい。綾瀬さん、あまり詳しくは教えてくれなかったけど。」

気遣いの塊のような、桜を思い浮かべる。

他人の為に動いて、その為に傷ついているような子だった。

「そっかー。なんか・・・びっくりだな。あんなに仲良かったのに。」

「ね。私も驚いたわ。」

溜息と共に呟く彼女に、意地の悪い視線を送る。

「委員長、きみっちゃんのこと好きだったもんね。」

「はあ？」

俺の言葉に、心底驚いたように口をあける。

「だってさー、きみっちゃんのことよく見てたじゃん。」

持っていたグラスを置くと、彼女は右手を額にやった。

「何言ってるのよ。別に早坂君の事、好きじゃなかったわよ。私。」

呆れたような声に、なんとなく意地になって反論する。

「嘘だー。俺にはわかってたもんね。」

「勘違いよ、ただの。本当におっちゃんこちよいなんだから。」

むうっ・・・と2人でにらみ合うと、嫌なタイミングでおっちゃんが顔を出した。

「おい、和樹・・・と。あれ？痴話げんか？」

おいっ、空気読め！このおっさん！

一瞬おっちゃんの方を睨むと、委員長が無表情だった顔に笑みを浮かべる。

「違いますよ、高校の時の話をしていただけなんです。あの、梅酒のおかわりいただけますか？とても、おいしいですね。」

その言葉におっちゃんは上機嫌でグラスを受け取ると、フルスピードでおかわりを持ってきた。

「ま、すべては和樹が悪いっつーことで！」

「なんでだよ。」

そのまま、障子をぴしゃりと閉めて行ってしまった。

「面白い方ね。」

何でもないように話し出す委員長を、上目遣いで見る。

「委員長つてば、大人になりやがって。」

恨めしそうな俺の声に、彼女は口に手を当てて笑い出す。

「津田君だつて、充分大人じゃないの。大口の契約が取れたなんて今日はお祝いね。」

新しく注がれたビールに、委員長のグラスがカチリと合わさる。

「委員長つて・・・、うまいよな。」

人の扱いが。

最後の言葉は、なんとなく飲み込む。

だつて、なんか手のひらで転がされてるのを認めるみたいでさ。どうせ、ちっせープライドだよ。

委員長は首をかしげながら、グラスを口に運んだ。

そして思い出したように、俺を見る。

「話し戻るけど、今度綾瀬さんと飲む約束してるの。津田君もどう？」

「行く！そして是非、彼氏を連れて来いと言ってくれ！」
即答。

彼女は苦笑い。

「私も会ってみたいのよね。出会ったきっかけが、非日常の産物だつて言うんだもの。よくわからなくて。」

「非日常？」

俺の言葉に、軽く頷く。

「とりあえず連絡しておくわ。ま、この話はこの位にしておいて・・・と・・・？」

彼女の傍らから、少し大人しめな電子音。
今時の着うたじゃないところが、彼女らしい。
俺はビールに口をつけながら、でなよ・・・と促す。

彼女は俺の言葉に少し迷いながら鞆を開いて携帯を手に持ったけど、
相手を確認することもなく電話を切った。

「え？どうしたの？」

そのまま携帯を鞆にしまいこむ彼女に問いかける。
委員長は、笑いながらもなんでもないと答えた。

「そうだわ、綾瀬さんに連絡しちゃおう。」

そうぶつぶつというのと、もう一度携帯を出してメールを送る。

「委員長？」

なんだか変な流れだな・・・と彼女を呼ぶと、委員長はいつもの表情でにっこりと笑う。

「それよりも、飲みましようよ。津田君の成功を祝して！」

第3話 朝 起き抜けの夢

「早くしてよ、津田君。今日の放課後が提出期限だったでしょう？」

オレンジ色の柔らかな光を満たす、夕暮れの図書室。

学ランを脇の椅子に引っ掛けて、シャツを腕まくりした俺。

その前の机には、白紙に近い古文のレポート。

夕陽に染まった白のベストを着た委員長が、窓の傍で腕を組んで俺を見下ろす。

「委員長が代わりにやってよ、これ。俺、源氏物語苦手なんだよ。」
白紙の用紙を積み上げて、ぴらぴらと彼女に見せると、委員長は小さく溜息をついた。

「現代文は得意なのに、古文が苦手ってどんな頭してるのかしら。」
嫌味のように、俺に言うから。

「現代文が苦手なのに、古文が得意な委員長に言われたくない。」
と、にへら〜と笑って返す。

「口の減らない人ね。待つてるから、ゆっくり書いて。今日中じゃないと、受け取ってくれないわよ?」

俺の傍に来ていた委員長は、そのまま窓際にもたれて外を眺めた。
その姿を横目で見ながら、内心溜息をつく。

面倒だな。もう、適当に字稼ぎしちまうか。

ばらばらとめくった書き下し文の資料を、要約しながらまとめていく。

はじめちゃえば、早いんだよね。
やるまでが長いけど。

放課後の図書室に、人影はない。
俺が図書委員だから、ここでレポート書いてるだけ。
静かな、空間。

てかさ。2人でいるんだからさ。
少しは俺の事とか、意識してくれないのかな。
青春真っ只中の男女が2人つきりなんだぜ？
なんか・・・、俺、男として見られてない様で落ち込む。

ぐずぐずいってたレポートも、ものの20分で書き上げた。
さすが、俺。集中力と適当さの産物だね。

消しゴムのかすを払って、息を吐く。
そのままと委員長を見ると、彼女の視線は窓の外に注がれていて。
ずっと外見てるよな。
なんだろ。

こっそりと彼女の隣に立つ。
そこには。

きみっちゃん・・・？

校庭の隅で陸上部が練習をしている。

今まさに、きみっちゃんがゴールするところだった。

桜ちゃんがタオルを渡しながら、ストップウォッチを見せて何か言ってる。

オレンジの淡い光の中、幻想的で綺麗な世界。

「委員長、終わったよ。」

「ひゃっ。」

いきなり声をかけられて、委員長は叫び声を上げて肩を竦めた。隣に俺がいることに、少しも気がつかなかったみたいだ。それほど、真剣にきみっちゃんを見てたのかな。

委員長は気持ちを抑えるように、右手の甲を口に当てて息を吐き出した。

「驚かせないでよ、びっくりした。」

恥ずかしかつたのか、俺の方は見ずに窓のほうに向いている。

ほんのりと染めた、赤い頬。

かすかに震えてる、その指。

「気がつかない、委員長が悪いんだろ。」

いつも見ない委員長の姿に、なんだか悔しくて、口調がぶっきらぼうになる。

「ま、いいわ。レポート持って行くわね。」

俺の脇をすり抜けて机に置いてあるレポートに手を伸ばした彼女の腕を、思わず掴む。

「え?」

そのまま、窓に押し付けた。

目を見開く、彼女の表情。

大人びた言葉を使うわりに、俺の腕の中にすっぽりとおさまってしまふ小さい体躯。

少し長めの髪から、かすかに匂う彼女の香り。

そのすべてが、きみっちゃんへ向ってるのが、なんか悔しい。

「津田く……。」

いきなりの状況に、彼女の耳まで真っ赤。

俺は、その姿を見ながら耳に口を近づけた。

「何、見てたの？」

彼女の肩が竦む。

「ね、誰見てたの？」

震える彼女の肩。

かわいそうなことをしている気持ちより、彼女の想いの行き先が気になる。

「委員長？」

何も答えない彼女の顔を、ゆっくりと覗き込む。

「……痛い……。」

「えっ、あ……ごめっ……。」

彼女のその言葉に驚いて押さえつけていた右手の力を緩めると、彼

女は俺から逃れて図書室を出て行ってしまった。

開いたままのドアを見て、がっくりと肩を落とす。

俺、嫌な奴。

追いかけてようと宙に浮かんだままの右手を、ゆっくりと降ろす。

そのまま外を見ると、きみっちゃんと桜ちゃんの姿。

練習が終わったのか、2人で話してる。

遠目でも、幸せそうな雰囲気なのが手に取るように分かる。

委員長、きみっちゃんが好きなのか。

てか、俺、委員長が好きなんだな！。

きみっちゃんを目で追う委員長を見て、なんだか悔しくて仕方がなかった。

・・・俺、中学生かよ。

がっくりと、床にしゃがみこむ。

好きな娘いじめるしか能がないって、どんだけ子供？

うっ、明日からどうしょ。

とりあえず、謝らなきゃ。

机に戻って、レポートを手に取る。

せっかくまっけてくれたのに。

あゝあ。

溜息をつくとき、俺は片づけをして提出するべき先生のもとへと向う

た。

「・・・そんなこともあったっけな・・・。」
うつすらと瞼を明ける。

朝の淡い陽光が、カーテンのすきま越しに部屋の中に忍び込んでい
る。

てか、なんでこんな夢みてんだよ、俺！
恥ずかしさに、思わず両手で自分の顔を覆う。

まあ、仕方ない気もするけどね。

ゆっくりと自分のベッドの方を見ると、人の形に盛り上がったシル
エット。

規則正しい寝息が、聞えてくる。

昨日、面白くて盛り上がった俺はいつの間にか委員長が深酒してい
た事に、彼女が熟睡してしまっただけからきがついたのだ。

女性が相手だから、自分はセーブして飲んでただけ・・・。

うーん、気づいてやるべきだったな。

・・・ただ。飲むの初めてだけど、委員長の性格からして寝てしま
うほど飲むだろうか。

何か、ストレスでもたまってたのかな。

ソファの上で上半身を起こして、後頭部に手をやる。
シャワーでも、浴びてくっかな。

片隅に畳んであるバスタオルを手にとると、そのまま風呂場に向った。

熱いシャワーを浴びながら、冷めていく頭の中で記憶は逆行。

夢で見たあの図書室の翌日。

委員長は、普通だった。

「委員長……おはよう……。」

謝らなきやって気負っていったのに、委員長は俺を見てただ一言「レポート間に合った?」。

そして、軽く笑う。

昨日の、あの委員長はどこにも感じられなくて。

完璧な「委員長」が、そこにいた。

口を開こうとする俺に、「授業始まるよ」「そう言つと、手元のノートに視線を落とす。

その後姿を見て、謝ろつとしていた俺は何も言えずに席に戻るしかなかった。

で。

実は気になっていること。

昨日の委員長の携帯。

いかにも、とりたくなさそうだった。

着信拒否してたし。

何か、あったのかな。

「ふは、あっちー。」

バスタオルを腰に巻いて出て来ると、委員長が不思議そうな表情でベッドの上で起き上がっていた。

「え？何これ。つて・・・え?!」

何これって。

俺は苦笑いしながら適当にクローゼットから服を出すと、引き戸の向こう側でさっさと着替える。

「委員長、昨日寝ちゃったんだよ。だから、ここ、俺んち。」
沈黙。

着替え終わった身体を部屋の中に入れると、委員長が慌ててベッドから降りてるところだった。

「やだ、ごめんなさい。私、帰る・・・っ。」
足を床に着いた途端、ぐらりと彼女の身体が傾く。

慌てて腕を出して支えると、それにしがみつきながら何とか倒れずに踏みとどまった。

「委員長、昨日結構飲んだから、二日酔いきてるんじゃないの？無理しない無理しない。」

そのまま、ベッドに腰掛けさせる。

委員長は、顔を赤くさせて大人しく座った。

「なんか、頭痛い。でも、そんなに酷くないと思っただけど・・・」
「
右手で額に触れる彼女に、バスタオルとTシャツ、ハーフパンツを渡す。」

「シャワー、浴びてくれれば？昨日委員長、服に酒零してたから早めに洗ったほうがいいんじゃない？」

そのまま電車乗ったら酒のにおいするよ〜と、笑う。
そんな俺を、困ったように見返す彼女。

「大丈夫、別に見ないし。なんたって、寝てた委員長に俺手出してないもんね。えらくね？」

それでも逡巡している彼女の肩を、ポンッと叩く。

「さすがに、下着は貸せないけど。」

「！」
もっと真っ赤になった委員長は、俺の手から逃れるように立ち上がる。

「う・うん、じゃあごめん、借ります。」

それだけしどろもどろにいうと、風呂場に駆け込んでいった。

その後姿を見ながら、苦笑い。

はっはっは、下心なんて。

あるわけないさ、なあ、俺。

自分に言い聞かせるように、頭の中で繰り返す。

タオルで髪の毛をばさばさ拭きながら、カーテンを開ける。

そのまま窓を開けると、朝だというのにムツとした暑い空気。

「今日も、暑くなりそうだなあ。」

蝉の鳴き出した風景は、もう夏のそれだった。

第4話 彼女の理由

「委員長、昼飯何食いたい？」

朝ごはんを適当に食って、部屋の中でだらけ始めた俺は思い出したように委員長を見る。

「え？」

彼女は驚いたように、聞き返してきた。

「だから、昼飯。」

にっこりと笑う俺。

反比例するように、困り顔の彼女。

「私帰るわよ、津田君。ごめんなさいね、お邪魔しちゃって。」

そっぴいなながら、立ち上がろうとする彼女の右手を掴む。

「いいじゃん、別に。今日くらい遊ぼうぜー。」

「津田君……？」

訝しげな視線を、俺に投げる。

まあ、そりゃそうか。

「だってさあ、会社で仕事うまくいったって、喜んでくれる人プレイヤーでいいしさ。」

そっぴやって笑う俺の顔を見下ろしながら、少し声を強めて彼女は言う。

「津田君、そういうことは彼女ができてからその人に言ったほうがいいわ。普通の女の子なら、誤解しちゃうわよ。」

「してもいいよ。」

沈黙が、2人の間を包み込む。

彼女が溜息をついた。

「津田君の冗談は、聞きなれてるもの。私は本気にしないから安心していいわよ。」

ちっ、俺を嘘つきのような・・・

「じゃ、いい？」

とりあえず聞き返すと、しかたない・・・と言わんばかりに溜息をついた。

「じゃあ、一度家に帰る。それでいい？」

「うん、いーよ。そしたら、車で送るよ。」

立ち上がっていた彼女は、床に座る。

そこで、何かに気がついたのかむうっと頬を膨らました。

「車で送ってくれるなら、シャワー借りなくてもよかつたんじゃない。」

・・・あ。

いや、ホントに気がつかなかった。

けど。

なんかこの言われようは、ちょっといじめたくなる。

「寝ちやった委員長、ここまで運んできたんだぜ？役得役得。」

その言葉に、ばつの悪そうな表情を浮かべて溜息をついた。

「本当に強引ね、津田君。なんだか、大人の口の上手さまでくっついて最強になった気がするわ。」

「褒め言葉？」

嬉しそうに聞き返すと、彼女は呆れたように笑う。

「ちつとも。でも、それだけ口上手いのに彼女がいらないなんて信じられない。」

「そ？委員長こそ、彼氏いないなんて信じらんねーけど？」
即答で返すと、委員長は少し怒ったような顔をする。

「うるさいわね。」

むくれ顔の彼女。

その時、部屋に携帯の着信音が響く。

ビクツと肩を竦める彼女。

視線の先は、自分のバッグ。

俺が見ているのに気がついたのか、なんでもない風に携帯を取り出した。

「・・・ああ。」

相手の名前を見て安心したような声を出すと、電話を取った。

「もしもし？」

人の電話は聞くべきじゃないだろう。

俺は立ち上がると、隣の部屋に移動する。

笑い声が聞えてくるところを見ると、友達のような顔。

少しして、部屋の引き戸があいた。

「津田君。綾瀬さんなんだけど、もしよければ今日飲みに行かないかって。彼氏さんも途中までならこれるからって。」

「まじでー。」

そのまま携帯を受け取る。

「桜ちゃん？」

「津田君？元気だった？」

優しい優しい桜ちゃんの声。

卒業式で聞いた以来なのに、記憶と寸分たがわぬその声。

「元気。委員長には、強引さに磨きが掛かったって言われた。」
電話の向こうで笑う声。

「で、今日はどう？昨日椎名さんから津田君も来るって連絡貰ったから、早い方がいいかなって。」

「うん、全然OK。どこで待ち合わせ？」

聞き返すと、どうしようかしら・・・と困った声。

「桜ちゃん、どこから来るの？」

教えてくれた駅は、何てことはない、俺の使ってる駅からたったの3駅目。

お互いに、そんな近いところに住んでいたことに驚く。

「じゃあ、うちの近所の居酒屋にする？委員長、どう？」

桜ちゃんの賛成の返事を聞いて、委員長に確認する。

委員長は、少し苦笑いしながら頷いた。

「駅についたら連絡して？また後でね。」

で、そのまま携帯を切った。

「委員長、嫌だった？昨日の店。」

少し複雑な顔したから、携帯を返しながら聞く。

彼女は少し恥ずかしそうに笑った。

「だって、昨日酔ってた自分を見た人に会うのって、恥ずかしくない？」

ああ、そう言うことが。

「ま、相手はあのおっちゃんだからな。気にしない気にしない。そしてたらさ、早めに委員長の家に行こうか。」

待ち合わせは、夕方の5時。
ばたばたするの嫌だしね。

委員長は頷いて、携帯をバッグに納めた。

先に委員長の家に行つて、それから昼を食べようと車を走らせる。
真っ青に晴れ上がった空に、眩しいくらいの太陽。
昨日降つてた雨が、嘘のようだ。

委員長は助手席で鞆を膝の上で抱きしめながら、俯いている。
俺んちを出た時は結構話してたのに、委員長のアパートに近づくとつれて口数が減つてる。

握り締める指先は、力が入りすぎているのか少し白い。

こんだけされれば、何かあると思うよな。

委員長の姿と、昨日の着信。

ない頭使つて考えながら運転していると、委員長に呼ばれた。

「ここら辺でいいわ。少し待ってもらつていい？」
5 駅ほど行った、閑静な住宅街・・・とはいいづらい、原っぱが広がる田園風景。

少し向こうに、住宅とアパートがまばらに建つてる。

「え？アパートの前までつけるよ？」

降りようとする彼女に言うと、いらないっ・・・と言り返される。

少し大きめの洋服をまとった彼女が、走っていく後姿を見ながらゆつくりと車を前進させた。

家に、なにかあるのかな。

懸命に走る彼女は、後ろからついてきている俺の車に気がつかない。意識は、前にだけ向っているようだ。

アパートが近くなってきたところで、俺は路肩に車を止めた。そのまま彼女の向かった方に歩いていく。

大きな工場の角を曲がったその時、乾いた音が辺りに響いた。

「え・・・？」

何事かと思っただけ音のする方向を見たら、そこには委員長と知らない女がいた。

工場に挟まれた、細い路地裏。

人目につかないそこで、知らない女が何度も委員長を平手で叩いている。

「あんななんか、大嫌いよ！」

泣き叫ぶように委員長を叩くその女は、形容しがたいほどの憎しみが表情に表れている。

一瞬あまりの事に動きが止まってしまったけど、慌てて彼女の傍に駆け寄る。

バシッ

委員長を両腕で抱え込む。

その途端、鞆で思い切り殴りかかった女のそれは、俺の肩に当たって凄いい音を立てた。

「だ……誰よあんた！」

知らない男……俺が出てきたことに驚いたその女は、食って掛かってくる。

俺は委員長を庇ったまま、その女を見た。

「何があつたか知らないけれど、女の子がこんなことしちや駄目だよ。」

それだけいうと、委員長を見る。

「大丈夫？」

俺の問いには何も答えず、委員長は俯いたまま。

その間に、相手の女は走り去ってしまった。

少し腕を緩めて委員長を見ると、叩かれた頬が赤くなって痛々しい。多分見えないだけで、服の下も赤くなってるんだろうな。

「委員長？」

何も言わない彼女に心配になってもう一度呼ぶと、何も見えていなかったようなその瞳に光が差す。

「あれ、津田君？何でここにいるの？」

「え？」

いたって普通のその声に、少し驚いてまじまじと見る。

彼女は俺の腕から抜けると、アパートに向って歩き出す。

「待っててっていったのに、来たんだ？今着替えてくるから、もう

少し待ってて。」「
それだけいうと、呆然としている俺を尻目にアパートへと消えて言った。

後に残された俺は、呆然とその姿を見送る。

え？今の何？

叫ぶあの女も恐かったけど、今の委員長長って・・・

俺見てたのに、動揺も何も無し？

てか、俺、眼中はいつてるのか？

どうしたらいいのかわからずに、とりあえず車に戻ってみる。

運転席に座って、エンジンかけて、クーラーつけて・・・

どこか納得のできない状態で、ハンドルに腕を乗せる。

きつとあの女と何かあったんだよな。

で、ぶたれてて。

昨日の着信も、あの人か？

溜息をつく。

何かあったのに、何もなかったかのように振舞う彼女。

一瞬、今日の朝見た夢を思い出す。

きつと、彼女にはスイッチみたいなのがあった。

それをいれると、感情をコントロールできるのだろうか。

・・・そうしないと、生きてこれなかった？

でも、なんで？

不可解な行動に、首を傾げるばかりだった。

第5話 俺の行動

「久しぶり、綾瀬さん。」

いつもの居酒屋、いつもの座敷。

俺と委員長。その向かいに桜ちゃん。で、俺の前に

「はじめまして、木田といいます。今日はお邪魔してすみません。」
すげー行儀のいい彼氏。

小柄な桜ちゃんと、背のたけえ彼氏の木田君。

言わないけど。

うん、言わないけど。

きみっちゃんを思い出す。

背の高いきみっちゃんも、この彼氏位の身長だった。

「ま、とりあえず乾杯。」

女性2人はアルコール、俺と彼にはウーロン茶。で、乾杯。

楽しそうな桜ちゃんの笑顔が、可愛い。

「桜ちゃんは、ちっとも変わらないねえ。」

思わず、本音が口をつく。

桜ちゃんは少し頬を膨らますと、委員長を見た。

「椎名さんは、大人っぽくなったね。おかしいな、何で私だけ。」

「それは、もともとの作り?」

木田君が、ぼそりと返す。

「おっお前面白い!木田・・・なにくん?」

「たかゆきくん。」

自分を指差してそう言うから。

盛大に笑って、あだ名をつける。

「たかっちゃんでおまえはたかっちゃんだ！」

「たかっちゃん？」

いきなりあだ名で面食らったように、たかっちゃんは桜ちゃんを見た。

桜ちゃんは笑いながら俺を見る。

「ホント津田君は、下の名前でしか呼ばないよね。」

「まったくな。」

委員長が同意して頷く。

「いいじゃん、言いやすいんだから。な、たかっちゃん。非日常の産物って何？」

「うわわっ。」

桜ちゃんが慌てて声を上げる。

「あら、私も聞きたい。」

委員長も、俺のその質問にのっかる。

たかっちゃんは、少し桜ちゃんの事を見て、言ったな・・・？と咳く。

桜ちゃんは申し訳なさそうに、上目遣いで彼を見た。

お、少年。今の目線でやられたらう。

男目線でたかっちゃんを観察しながら内心笑っていると、溜息をついて二人の出会いのきっかけを話し出した。

「俺と彼女が電車を乗り過ぎして。同じ駅で、後先考えずに降りたら終電が終わってたって言う、間抜けな始まりですよ。」

話し出す彼の顔は、それでも懐かしそうに表情が柔らかい。

無人駅だったその場所で朝まで過ごしたけれど、途中寝てしまった彼が目覚めると彼女はすでに消えていた。

眠ってしまう前に、彼は会いに行く約束をした。

だから、胸を張って会いにいけるように受験を頑張つて。

大学入学前、彼女に会いに行ったら、男に絡まれているのを助けて思いを伝えたと。

「かつこいいなあ、見知らぬ男と一騎打ち？」

少し感心したように呟くと、たかっちゃんは恥ずかしそうに頭をか

く。「彼女助けることで頭いっぱい。あんまり考えないで行動したというか。」

途中で桜ちゃんが言葉を補ったりしてはるけど、たかっちゃんは上手いこときみっちゃんやその相手の話を避けて説明する。

きつと、その絡んでいた男がきみっちゃんなんだろう。

桜ちゃんの表情で、なんとなく察しはつく。

ああ、こいついい奴だな。

率直な感想。

たかっちゃんは・・・木田君は、人の痛みを知る子だ。

だから、彼女と気があったのかもしれない。

聞き終わった後の俺達の感想。

「ドラマみたい〜っ！」
きゃいきゃいとしゃく俺達は、まるで今時の女子高生のよう。

「ちょっと聞きました？奥様ってば。」

ふざけて俺が言つと、委員長が笑いながら返してくる。

「羨ましいですわ、独りもんの私たちにはね。」

桜ちゃんは照れてるのか、真っ赤な顔。

「まあ、これくらいで勘弁してください。ちょっと、飯、頼んでもいいっすか？」

そう言うなり、障子をあけてじゃこめしと豚の角煮を頼んだ。
しばらくしておっちゃんが、ほかほかのそれを運んでくる。

「なんだい今日はダブルデートかいっ。」
無駄に勢いがいいっすの

「はいはい、おっちゃんは向こう行って。」

余計なことを言われる前に、スパコンツと障子を閉める。

向こう側から聞えるおっちゃんの声に、無視を決め込んで座布団に座りなおす。

「少年、がつつりいくねえ、」

ご飯がつくなりがつがつと食べ始めたたかつちゃんは、一気にかつこむとウーロン茶を飲み干す。

「これからバイトなんですよ。夜中までだから、食つとかないと持たないもんで。」

そういつて笑うたかつちゃんは、よく見るとすげえ筋肉がついてる身体。

「バイト、結構掛け持ちしてんの？筋肉ついてんなあ。」

手を伸ばして腕に触れると、たかっちゃんは首をかしげながらそうですか？と頷く。

「もともと高校でバレーボールやってたからですかね。バイトはもうでもないですよ？5つ位だから。」

「いや、多いつて。」

俺が突っ込むと、桜ちゃんがそうそうと右手をひらひらと振る。

「この子、城東出身なんだよ。」

その言葉に、彼を見る。

「え！後輩かよ！」

「ええ、まあ。」

驚かれ方に反対に驚いたのか、言葉少なに答える。

「え、じゃあさ。」

そこから彼が帰るまで、高校の思い出話に花が咲いたのは言うまでもない。

「は、楽しかった。」

外に出ると、生暖かい夏の風。

まだ9時になるかならないかだけど、今日も熱帯夜は確実だろう。

桜ちゃんは、駅前からバスに乗っていった。

たかっちゃんの帰りを、アパートで待つそうだ。

なんだか幸せいっぱいの彼女を見ると、きみっちゃんの事は聞けなかった。

「どうする、委員長。俺んちで飲みなおす？」

「え？」

腕を上にあげて伸びをしていた彼女が、振り返る。

その表情は、・・・よくわかんない。
困惑したような、でも、嫌じゃなさそうな。

「委員長？」

もう一度呼びかけると、表情が一変する。

いつも通りの、委員長。

「帰るわ、私。」

その表情に、どうしたもんかと内心考える。

もし、帰って昼の彼女がいたら・・・？

でも、このまま引き止めるのって、確かに同級生にしてはやりすぎだよな。

いや、俺はいいんだけど。

ぐちゃぐちゃと考え込む俺を尻目に、彼女は改札口へ歩き出す。

「じゃあね、ばいばい。」

「あっ。」

気がついたときには、既に改札口をくぐった向こう側だった。

手を振りながら人波に消えていく彼女の後姿。

溜息をつきながら、自分のアパートへ向けて歩き出す。

どうしたもんか。

委員長、放っておいていいもんか。

気になって仕方ない。

自分の足元ばかり見ながら、ほんの少し歩けばつく自分ち。

階段を上がれば、部屋。

右手にまわれれば、車の置いてある駐車場。

何かあったら困るから、酒を控えた今日の俺に拍手。

高校3年の、図書室で。

彼女に言いたかった言葉は、あんなことじゃない。
あんなことをしたかったわけじゃない。

きみっちゃんを見てると気づいて、奴に嫉妬した。
俺を見てくれない委員長を、困らせたいと思った。

要するに、自分のほうに振り向いて欲しかっただけ。

でも、あんなことをしても、彼女は俺をちゃんと見てくれなかった。
何もなかったように流されて。

そのまま卒業を迎えた。

大学に入って卒業して、会社員になって。

それなりに付き合った女の子はいたけれど。

それでも本気になれない自分がいた。

年数だけは過ごしてきたけれど。

あの時の俺は、あの場所です。

オレンジの光の図書室で、立ち尽くしたまま。

右手に足を進めて、車に乗り込む。

昨日行ったばかりだから、大体は覚えてる。

エンジンキーを回して、車を走らせる。

委員長のところへ。

委員長の傍へ。

同級生にあるまじきで、いいじゃないか。
俺は、今、委員長と一緒にいたい。

第6話 あの時のも やり直し

たつた5分先の委員長のアパートまで、車で30分。
駅から遠そうだから、もしかしたら先に着くかもしれない。
昨日と同じところに車を止めて、アパートへ歩き出す。
街灯の少ないこんな場所で、委員長は彼女の襲撃を何度受けたんだ
ろう。

工場の角を曲がると、アパートに入っていく委員長の姿が見える。
やっべ、一足遅かったか。

慌てて走り出す。
部屋に入ってからだと、連れ出すの難しそう。

後を追うように階段を登っていくと、彼女の短い叫び声。

「何で・・・!？」

え、俺の事ばれた?
びっくりして声のした方へ走りよる。

そこには、1人の男と委員長の姿。

今度は男か!

なんとなく出て行きにくくて、さっと踊り場に身体を隠す。

え〜と、俺、何やってんだろ。

やっぱり、委員長彼氏いたのか・・・。

ちよっと落胆しながら、佇む。

「どうして、携帯に出てくれないんだ？」

「それは……。」

静かな男の声。

意外と、あの女みたいに声を荒げてくれた方がなだめやすいしやりやすいんだよな。

冷静に装う奴ほど、面倒。

そこで、ふと気がつく。

携帯？出ない？

てことは、昨日の着信の相手……か？

気になって、耳を澄ます。

周りが静かなこの場所は、小さな声でも内容まで聞えてくる。

「もう、電話しないでって言ったでしょう？あなたには、彼女がいるじゃない。私は、ただの同僚なんだから。」

……この男の浮気？

状況が飲み込めず、頭ん中フル回転。

「あいつとは、別れた。知ってるだろ？そんな事。今日、ここに来たって聞いたよ。」

「……。私は、あなたと付き合う気はないわ。帰ってください。」

きっぱりと言う、委員長に拍手。

「あんなに親身に相談に乗ってくれたのは、少しでも俺に気があったからじゃないのか？」

・・・それは、委員長だから・・・？

そんな言葉が、頭に浮かぶ。

委員長、昔っから面倒みいいからな。

「違う。あなたと彼女、2人とも私の友人だったからよ。なのに、私が壊してしまった。」

「違うっ！俺の事が好きだからなんだろう？」

話しかみ合ってねえ。

なんかこの会話、頭痛くなるな。

そんなことを思いながらそっと2人の方を見ると、壁に押さえつけられた委員長に、男が覆いかぶさっていく姿がスローモーションで見えた。

「・・・！」

身体が自然に動く。

数メートルの距離を全力で走って、二人に近づく。

その男の胸倉を掴んで、彼女から引き離れた。

「・・・つだ・・・く？」

そのまま彼女を抱きしめる。

男は引き離された勢いのまま、床に転がった。ぎらつくその視線が、俺に向けられる。

俺は、そいつの目を見据えながら吐き出した。

「女に怖い思いさせてんじやねえよ。」

そのまま、彼女を連れて歩き出す。

委員長は抗いもせず、そのまま俺と歩き出した。

後ろで男が立ち上がった気配はしたけれど追いかけてくる様子もなく、そのまま委員長を俺の車に乗せる。

何もしゃべらない、委員長。

ま、当たり前か。

そのまま俺んちにつれてくる。

それでも、何も言わない。

仕方なくソファに座らせて、テーブルを挟んで向かい側に座った。

「・・・委員長、大丈夫？」

なんとか口から出てきた言葉は、これだけだった。

くっそ！口だけは上手いと褒められた俺が・・・！

いや、褒められてないか。

内心の葛藤をよそに委員長を見ると、今、目を覚ましたかのように瞳に光が戻った。

「あれ、津田君。・・・ごめん・・・私、帰るね。」

いきなりそう言うとソファから立ち上がる。

って、おいおいっ！

慌てて立ち上がった彼女の腕を捕まえる。

途端、委員長の身体に緊張が走ったのを見逃さなかった。

でも、離れたら出て行ってしまいそうだったから。

「離して？」

「嫌だ。」

即答する。

彼女は困ったように、俺を見上げた。

「ね、津田君。こういう事は好きな人以外にしちゃ駄目。いろんな人が傷つくから。」

「それ、さっきの自分の話？」

彼女の肩が、びくっ・・・と竦んだ。

それでも、彼女の声色は変わらない。

「・・・津田君には関係ないわ。」

その言葉を聞いた途端、俺の中で何か弾けた気がした。

パンツ

で。

彼女を掴む腕に力を込めて引き寄せると、壁に腕を押さえつけた。見下ろす彼女の耳に、唇を寄せる。

「なんで、何もなかったことにするの？」

彼女は、何も言わずに俯いたまま。

「何かあったんでしょ？俺、委員長の力になりたい。」

苦しくて。

また、あの時のようになかったことにされてしまっただけじゃないかって、そんな考えが頭に浮かぶ。

でも、あの時と違うこと。

俺が、少しは大人になったこと。

好きな娘をいじめるんじゃないって。

何も答えない彼女の表情を覗き込むと、複雑な表情をしている。

「委員長？」

俺の声に口を開いた彼女の言葉は。

「してもらっ理由ない。だから、離して。」

冷たい口調の、その言葉。

頭の中で、高校生の俺が、今の俺をじっと見ている。

分かってるよ、頑張るよ。

そいつに答えながら。

「俺、委員長の事、好きなんだけど。それじゃ理由にならない？」

彼女の動きが止まる。

「……冗談言わないで。分かってるから、あなたが優しいことくらい。」

・・・

ごめん、高校生の俺！
まだ、子供だ今の俺も！

頭に血が上る。

自分の気持ちを、また流される羽目になるなんて。

ここまでして、「冗談だとおっ！

「この状況、覚えてない？」

「・・・。」

彼女は何も答えない。

「放課後の図書室で、俺は君にこうやって迫ったよね。でも、君は翌日何もなかったように俺に接した。」

ああ、いいさ。恥ずかしい青春の思い出でも、暴露してやるうじやねえか。

「悔しくて、早坂に嫉妬して。そのまま卒業して。確かに他の子と付き合ったこともあるけど、でも、駄目だった。」

委員長は、動きもしない。

「昨日、久しぶりに委員長に会って。今日まで一緒にいて。俺ね、気がついたんだ。あの図書室の時から、俺はずっと委員長の事を思い続けてたんだって。鈍くて悪いけど、委員長も大概鈍いぜ。」

何の反応も示さない彼女の頬に、腕を押さえてる反対の手で触れる。

「委員長？」

途端、彼女の顔が真っ赤に染まる。

あれ？初めて見るよ、こんな反応。

ちよつと気をよくして、ここぞとばかりに畳み込む。

「高校の頃、委員長の事好きだった。今も、好きだ。」

おお、耳まで真っ赤。

うーん、ここは一つ彼女から何か言葉が欲しいところなんだけど。

「委員長？」

もう一度呼ぶと、彼女がぎゅっと目を瞑って声を荒げた。

「だって、津田君。私だけ“委員長”だったじゃない！」

「へ？」

思ってたなかった言葉が返ってきて、変な声が出る。

「昔から、私だけ“委員長”で。皆は名前で呼ぶのに、私は津田君の中で友達でもなんでもない、“委員長”なんだって。」

そう思ってたて・・・と一気にまくし立てる彼女の顔は、今にも溶けてしまいそうな位真っ赤。

つついられて、顔が熱くなっていく。

「いや・・・、それは・・・。」

彼女のその言葉に、うろたえる。

そう、実は、俺。彼女の名前呼んだことない。

「だから私、懸命に“委員長”を演じてきたのに。」
「えっ、演じてきたあ？」
「なんだそりゃ。」

第7話 あの時 その行方

彼女はしまったとでもいうように、口を片手で塞ぐ。その手をあいた手で掴みあげると、壁に押し付けた。

「どういうこと？」

意味分かん。

なんで、“委員長”を演じなきゃいけないんだ？

「だって……、あなたがずっと“委員長”て呼ぶから。それに相応しい自分でいたいと思って……。」

一瞬、思考がストップ。

押さえ込んでいた手を離して、髪をかき上げる。

「え、ちょっと待って。委員長が好きだったのって、きみっちゃん……早坂だよな？」

その委員長の言い方からすると……

彼女は上目遣いに俺を睨む。

「だから違うって、昨日も言ったでしょ？」

「だって、図書室の時……。」

ずっと校庭の早坂の事見てた。

意味が分からず、ぐるぐると記憶を辿る。

そんな俺を見て、彼女は溜息をついた。

「……綾瀬さんを、見ていたのよ。」

観念したように呟く彼女に、あっちの人？て聞いたら睨まれた。

「早坂君に寄り添う彼女が、私には眩しかったの。素直に自分の感情を出せる彼女が。どうして私、こんな可愛くない性格なんだろうってそんな事思ってた。」

それに・・・

話を続ける彼女は、俺から視線をはずす。

「津田君の事、盗み見してたなんて気づかれなくなかったし。」

・・・

「ええっ!？」

素っ頓狂な声を上げる俺。

「ちよつと待て、委員長！俺の事好きだったの!？」

今の言い方って、そういうことだよな？

つい叫んで彼女の両肩を掴むと、少し眉をひそめて目を伏せる。

「でも、あなたは翌日も、私のことを“委員長”って呼んだじゃない。だから、からかわれただけだと思って凄く悲しかった。」

心臓がばくばくいつてる。

はっえーな、鼓動。

こんなに早くなるんだ。

そんな事を考えながら、ぽかんと彼女を見ていたら、強張っていた彼女から力が抜けた。
おもわず俺も力を抜いて、2人で床に座り込む。

「私を好きだったって言うなら、なんで、委員長って呼ぶの？」

自分の事を話し終えたからだろうか、いつもの委員長の表情に変わっていく。

「え……？それは……。」

これ以上、俺に思春期を暴露しろと……？

少し視線を彷徨わせると、委員長をちらりと見る。

少しひいてきた頬の赤みが、彼女が冷静に戻り始めていることを垣間見せる。

うう、叫んだり怒鳴ったりしているうちにこんな会話終わったかった。

自分もほとんど冷静になってるこの状況で、言うの？

青いこと。

委員長は、黙って俺を見上げてる。

ああ、もういいよ！

言えればいいんだろっ

「呼ばなかったんじゃないかって、呼ばなかったのっ。委員長だけ名前
で呼ばなかったのは、俺にとって委員長が特別だったからなんだよ。」

最後のほうが、どんどん小声になっていく。

「ちくしょー、青かったんだよつ。まだ18歳の若造だったの!!
名前呼ぶのが恥ずかしいなんて、本人に言えないだろ?」

「特別・・・?」

「好きだったから、言えなかったんだって!分かった?!」
勢いで叫ぶと、彼女の肩を掴む。

「で、委員長は?」

「え?」

やり返してやる、ちくしょー

彼女は少し考えて、にっこりと笑った。

「名前呼んでくれたら、考えてあげる。」

お前は委員長じゃなくて、女王様か・・・

「弥生さん!」

呼んだろーじゃねえか。

ああ、呼んでやるぞ。

未だに恥ずかしいけど、そんな青いこと言ってらんねえ。

呼ばれた彼女はびっくりして目を見開いたけれど、ぎゅっ・・・と
俺の首に両腕を回した。

柔らかい感触と、彼女の匂い。

「好きよ、津田君。」

幸せすぎて、眩暈しそう。

委員長の身体に腕をまわして、抱きしめる。

俺の背中にまわされた彼女の腕が、ふと肩に行き着いて止まる。

「昼はごめんなさい。あ、いえ夜もだけど。」

昼の女に叩かれた肩は、別に痛くないけれど赤くはなっていた。

「あれ、一体なんだったの？」

そう聞くと、彼女は溜息を零した。

「2人とも会社の同僚で恋人同士でね。少しケンカしてて、男の人の方に相談されたの。どうしたらいいか分からないって。」

嫌な予感……

「相談にのってたなら、私が彼のことを好きだって勘違いしたらしくて。彼からは迫られるわ、彼女からは裏切り者って言われるわ悲しくなっちゃった。」

「なんちゅーか、ありがちな……。」

彼女は悲しそうな表情。

「ね。私も、親身になりすぎちゃったのかも。2人をどうにかして

あげなきゃいけない。相談まで持ちかけてきたこの人を、どうにかしてあげなきゃいけないってね。」

でも・・・と、言葉をつなげる。

「さっきの津田君の登場で、彼も分かってくれたんじゃないかな？なんて、そんなことも思ったり。」

かもな。

目の前で、彼女搔つ攫つて来たわけだし。

「ま、駄目だったら俺が言いに行く。」

その言葉に、くすりと彼女が笑う。

「でもびっくりしたわ。いきなり津田君が来るんだもの。」

まあね。

「でもさ。なんかたかつちゃん・・・木田君みたいな登場の仕方じゃなかった俺？今思うと恥ずかしいかも。」

さっき、たかつちゃんから聞いた話が脳裏に浮かぶ。

恥ずかしいなあと呟くと彼女の腕が俺から離れて、少し空間が開く。

「確かにね。だって私にとって、昨日からなんでもない日常じゃなくなってたもの・・・これが、非日常の産物って事なのかしらね。」

2人で、噴出す。

「そうかも。」

俺だってそうだ。

昨日、いきなり大口の契約とって絶好調で。
委員長に会って、彼女と今一緒にいる。

ありえない偶然。
ありえない日常。

それをきくと、非日常っていつのかも。

「じゃ、これからの日常を、よろしくね。」

そうやって笑う彼女を抱きしめる。

「もちろん、弥生さん。」

やっとすんなりと、彼女の名前を呼ぶ。

それでもさん付けのところは、突っ込まないように！

そんな自分突っ込みをしていたら。

くすりと彼女の吐息が漏れて。

そしたら、彼女はこう言ったんだ。

・・・特別だから、やめないで。私、委員長がいいな。

俺、彼女にはまりまくる予感です（笑

「よっすー、委員長。」

会社帰り、いつもの場所で待ち合わせ。

委員長はきつちりした身のこなしで、にこっと笑う。

「お疲れ様、津田君。」

そういつて歩き出す。

「どう？その後。」

あの時委員長を悩ませてた2人は、しばらくして仲直りしたらしく。

「もう、大丈夫って言われたわ。話し合っつてよりを戻したみたい。まったく、私しか損してない気がする。」

ふくれっつらの彼女の頬を、指で押す。

「でも、嫌じゃないでしょ。なんたつて最強委員長だからね。」
彼女は、笑う。

「そうね。役に立っつたのならそれで良いわ。」

そして、いつもの店のドアを開ける。

「おっちゃん、今日もすいてんな。」

「なんだとおっ！」

「あはは、こんばんは。」

いつものやり取り、いつもの笑顔。

こうして、俺の日常は彼女と共にある。

第7話 あの時 その行方（後書き）

最終話となります。

御覧くださいありがとうございます。

ご感想・ご意見等頂けるととても嬉しいです。

どうぞよろしくお願いいたします。

10月から、続編「特別の定義」の投稿をはじめました。
リクを下さった、KO様、ありがとうございます^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5383h/>

想いはあの場所で

2010年10月9日03時02分発行